

## 二重否定文の発話の付加的役割について

四津雅英 (YOTSU Masahide)

東京海洋大学

---

二重否定文の発話はしばしば、二重否定されている文の発話と同じ内容を伝達しつつ、ある種の付加的内容を伝達する。たとえば、「花子は試験に合格しなかったのではない」という二重否定文の発話は時として、二重否定されている文と同じ内容(花子は試験に合格した)を伝達しつつ、花子の合格には何らかの問題があった(点数が合格ラインぎりぎりだったなど)といった内容をも伝達したりする。

二重否定文の発話が伝達するこうした付加的内容について、単なる記述・分類ではなくて原理的解明を試みた主な論者として、ホーン(L. R. Horn, *A Natural History of Negation* (1989)など)とレヴィンソン(S. C. Levinson, *Presumptive Meanings* (2000)など)が挙げられる。彼らは、二重否定文の発話が伝達するこうした付加的内容は推意(implicature)の一種であると見なし、彼らが推意に関する一般的分析のために導入している原理に基づいて説明を行っている。彼らの見方によれば、二重否定文の発話によるこうした付加的内容の伝達は、非典型的な表現の使用による非典型性の伝達の一つであり、対応する典型的な表現の使用がしばしば典型性を伝達するのに対し、非典型的な表現の使用によって、その典型性の否定に相当する内容、非典型性の伝達を行うことができる。

だが、二重否定文の発話による付加的内容の伝達に関するこうした分析には少なからず問題があると考えられる。まず二重否定文の発話は、二重否定されている文の発話が伝達しうるどんな典型性についても、その否定に相当する内容、非典型性の伝達を行えるというわけではない(「その人はパイロットだ」という文の発話で、パイロットが典型的には男であることからその人が男だという内容を伝達しうるとしても、それだけでは「その人もパイロットでなくはない」などの二重否定文の発話によって、その人は男ではないという内容を伝達することはできない)。また、二重否定文の発話は非典型性の伝達とは見なせないような別の役割を果たすことがある(たとえば、ある会社の会議でライバルのA社のことが議題となっているときに、そこからそれて「B社の新製品は脅威だ」と言い出した人に対して、他の出席者は「B社の新製品が脅威でないわけではないが、それは今回の議題ではない」などと応じることができる)が、そうした事例をこうした分析ないしその拡張で扱えるのかという問題もある。本発表では、従来の主要な分析では十分に捉えられていないような、二重否定文の発話の付加的役割の諸相を踏まえた上で、それらに対する新たな分析を試みたい。